名古屋柳城短期大学
ちゃぺるにゅーす
第18号
2010年7月20日

「沖縄の夏」

理事長　渋澤　一郎

「ちゃぺるにゅーす」をお読みの方でこの夏沖縄旅行を計画しておられる方がおられるでしょうか。わたしは、先日、教会の研修会で沖縄に行って来ました。着いた次の日に梅雨が明け、暑くなりました。この時期、沖縄は別な意味で熱い日々を迎えます。6月23日は沖縄では「慰霊の日」と呼ばれ、太平洋戦争の沖縄戦で亡くなった人々の霊を慰める日とされています。なぜ6月23日なのかと言いますと、65年前の沖縄戦が組織的な意味で終結した日だからです。ところが、本来は戦闘が終結して喜ぶべき日なのですが、そうとばかりは言えない理由があります。

ここで言う「組織的」という意味は沖縄日本軍の司令官が自決し、軍としての組織的な戦争は行わなくなったという意味にしか過ぎないからです。完全に戦争が終結したという意味ではないのです。軍司令官は、「最後の一兵まで戦うように。」と言い残して自決したと言われています。ですから残された兵士も戦いを止めるわけにはいかないのです。沖縄戦ではその日から後のほうが悲惨だったとも言われています。

沖縄住民も兵士も圧倒的な兵力のアメリカ軍の攻勢にただガマと呼ばれる洞窟の中に逃げ込み抵抗するしかありませんでした。ガマの中でも大きな悲劇がありました。ガマの中ではアメリカ兵よりも日本兵の方が恐ろしかったとも言われています。日本兵が自分たちを守るために沖縄住民をガマから追い出すこともありました。また、ある戦争体験者の方から聞いた話ですが、その方には赤ちゃんだった妹か弟がいたそうですが、その方の母親はある日、その赤ちゃんと一緒にガマから出て行ったそうです。そして、帰って来た時は一人だったそうです。ガマの中で赤ちゃんが泣くと、アメリカ兵に気付かれてしまうのです。沖縄戦ではそういう悲劇は数限りなくあります。そして、8月15日の敗戦を迎えても戦闘は完全には終わらず、9月に入ってからやっと終結したのでした。

そもそも沖縄戦は日本本土への米軍の攻撃を一日でも遅らせるための作戦でしかありませんでした。日本における唯一の地上戦でもありました。沖縄は日本本土の捨石とされてしまったと言っていいでしょう。

現在、沖縄には在日米軍基地の75パーセントが集中しています。普天間飛行場移転問題も結局は県内のどこかに移設ということになりそうな気配です。沖縄では基地がなくなるまで戦争が終わったとは言えないのです。日本本土に住むわたしたちは戦前戦後、そして、現在まで沖縄に重荷を負わせて来ています。一日も早く平和な沖縄になるよう沖縄に関心を持ち続け、平和のために何かできることをしていかなければならない責任があるのです。

梅雨が明けた沖縄の海は青く美しく澄んでいました。優しい人々と美しい自然の沖縄にそのような歴史があることを知って沖縄に行かれると、もっと深く沖縄を理解することができるのではないでしょうか。

新チャプレンに贈る言葉

前チャプレン 市原信太郎

引き継ぎも十分にできず、いろいろな仕事を押しつけるようにして転勤してしまいずっと気になっていましたので、このような機会を与えて頂き感謝しています。職住接近を絵に描いたようなわたしの場合と異なり、岐阜から通勤される下原先生は移動がかなり大変ですし、週2日という働き方にも不自由な点はあると思うのですが、いろいろな方からがんばっておられる様子を聞いて安心しています。

引き継ぎの不十分さに対する言い訳ではないのですが、チャプレンの働きというのはそれぞれのチャプレンの個性によるところが大きいというのがわたしの実感です。柳城にいた6年間で、わたしとしては「持ちネタを出し切った」という感じがありますが、今度の男子校中高という職場では、柳城であまり意識することがなかったこと、例えば運動部での経験が意外に役に立っています。下原先生も、いろいろな「持ちネタ」を抱えていると思いますので、自分なりの新しいチャプレン像をつくって頂けることと期待しています。

一方で、チャプレンが変わっても「チャプレン職」において変わってはならないものがあるということも思います。それは、この柳城という学校が「神のみ名によって人々が呼び集められている共同体である」ということを明らかにし、それを守るということです。この意味において、わたしは柳城、そして今勤務している立教という学校を広い意味での「教会」であると思っていますし、この点に関して、町の教会での勤務と短大チャプレン職との間にはなんの違いもありません。司祭職にある者としてこの場所で働くということは、「牧会」に他ならないと思います。

ただ、教会の牧会と学校でのチャプレン職が大きく違うということもずっと感じていました。一番の違いは、学校チャプレンは「学校全体」のために働く存在であるということです。学生に接する際は、学生集団全体を意識しながら行動しなければなりませんし、学校の共同体性を破壊するような行動、例えば礼拝の尊厳を損なうような行動（これは学生に限ったことではありません）には厳しく対処しなければならないこともあります。

柳城に限らず、すべからく私立学校というものは、建学の精神の具現化としての教育を行う機関です。チャプレン職にある者が学校の中で与えられている権威は、この点に由来します。下原先生の今回のポジションは「牧師」としての顔を前面に出して働くことができる立場だと思いますので、どうか牧会者でありつつ、一方で必要なときには自信をもってご自分に与えられた権威を行使するチャプレンであって頂きたいと思います。

新しいわたしの職場である立教の建学の精神はラテン語で「Pro Deo et Patria」です。訳すと「神と国のために」となりますが、この「国」とは日本国のことではなく、もっと広がりを持った「国」、すなわち「世界」とか「社会」と訳しうるものだと思います。この両者を対立概念とせず、この両者の接点に働く人材を育成する、という創立者ウイリアムズ主教以来のビジョンに深く共感しながら、新職場での仕事を始めたところです。

そして同時に、この言葉にせよ、「愛によって仕えよ」にせよ、一学校の建学の精神ということにとどまらず、そこに込められた普遍の価値ということを思います。わたしたちそれぞれの働く学校は、対象や方法などには異なる点があっても、共に聖公会に属する学校として、真理であり道でありいのちであるキリストの愛によるうながしを受けて教育を行う所だと信じておりますし、そうでなければならないと思います。主にある同労者として、これからもそれぞれの場所で一緒に働いていきましょう。

前期の礼拝から

6月9日（水）大井祥子先生
（附属柳城幼稚園）

チャペルで話をされる大井先生

柳城の卒業生で、附属幼稚園主任教諭の大井先生から、素敵なお話をうかがいました。

＊　＊　＊

幼稚園で働きはじめたころの私は、この仕事は２～３年で辞めて、結婚して家庭を築こうと思っていました。でも、園では、毎年、子どもたちとの出会いがあります。毎日、子どもたちと生活を共にし、成長を間近に見ることができます。そして、今年受け持ったこの子どもたちが年中になったらどんな姿を見せてくれるだろう、年長になったらどんなことができるだろう、という気持ちになります。この子どもたちの成長をもうちょっと見たい、もっと一緒に遊びたいと思って、毎日、毎週、毎月、毎年と、時が重なっていき、いつの間にか長く勤めることになりました。

子どもたちのなかには、私を呼ぶのに「お母さん」と言ってしまって「ああ、間違えた」と笑う子もいます。舌のよく回らない口調で「やまだせんせい」と呼んでくれた子もいました。「山田」は私の旧姓ですが、その子は私以外のどの先生にも「やまだせんせい」と言うんです。朝、登園したときは、職員全員に「やまだせんせいおはようございます」を繰り返していました。いつも私についてくる子もいました。私は担任ではないのに、気づくと私のすぐうしろについてきて、振り返るとニコッと笑うのです。大勢のなかから、どうやって私を見つけるのだろうと不思議でした。

受け持ちのクラスに、なかなか話の聞けない子がいました。みんなが静かになって着席して、じゃあ先生がお話しするね、というときにはもう席を立ってどこかに行っている。そんなことが続いて、私も困っていました。あるとき、その子に聞きました。「今ね、何するときか、知ってるかな」「今、静かにお話を聞くとき」「よかった、知ってるんだよね。じゃあ、知ってて、どうして立っちゃうんだろうね」その子はちょっと困った顔をして、「だって、うかれちゃうんだもん」と答えたのです。それを聞いて、「ああ、そうか、うかれてたら、席を立ちたくなるよね、歩きたくもなるよね」と笑顔で納得しました。そして、「でもね、みんなでお話を聞くときに静かに聞けると、次にまた楽しいことがすぐにできるよね」と話し合うことができました。

園で一番小さい満３歳児のクラスに入ったばかりのある子どもは、どの職員にも挨拶ができたのですが、担任の私に対してだけは口を閉じて、顔をうしろにそむけ、自分の視野に私を入れませんでした。それでも、一緒に生活を送るなかで次第にうちとけて、気づくと私の背中にくっついてくる仲よしになりました。そんな関係ができてからのことですが、その子のお母さんが私に言いました。「あの子は入園したころ大井先生の顔をみるとそっぽを向いて、失礼なことをしました。あの子は、誰にでも普通に挨拶ができる、拒むことをしない子だったのに、大井先生に対してだけは『いやだ』と拒む。でも、あの子が家族以外の人に対して拒否の感情を出せたのは、大井先生なら出していいんだ、出せると思ったからだと思います。そんな先生が担任だったので、私たちは安心していました」その話を聞いて、私も安心しました。この子にとって、私は、安心して拒否の気持ちをぶつけることができる存在だったのです。

私は、目の前の子どもたちにも、遊びに来てくれる卒園生たちにも支えられ、職場のみんなとも力を合わせて、今、保育者として子どもとの生活を送ることができています。みなさんにも、これからいろいろな出会いがあります。将来出会う子どもたちとの幸せなときを思い描いて、勉強に励んでください。

（報告：村田康常）

前期合同礼拝報告

「山古志の子どもたちは、今」

松本　普 さん

6月16日（水）、2010年度の合同礼拝が行われました。蒸し暑い1日でしたが、空調装備が整えられた本学体育館内は快適でした。

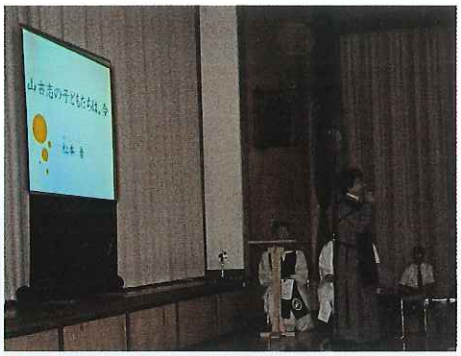
ゲストスピーカーは、聖公会修道士、松本普（まつもとひろし）さんです。「ささしま共生会の松本さん」として、名古屋市のホームレス支援に大きな働きをされていることで有名ですが、今回のテーマは「山古志の子どもたちは、今」です。2004年10月23日、新潟県中越地方を襲った大地震後の復興に携われたお話が中心となりました。学生の感想と合わせて、当日のお話を振り返ってみましょう。

冒頭、松本さんは、ホームレスと震災者には共通するものがあると話されました。それは、共に、ある特定の人だけに起こるものではないという意味です。

どうしてホームレスになっちゃう人がいるの？と、母に尋ねたことがあります。みんないろいろな理由があるのよ、と母は言いましたが、その時の私には、リストラとか家族との喧嘩、暴力などの浅いことしか思いつきませんでした。（A H）

松本さんは、自分の命を守るため、心を守るため、身を守るため、生き方を守るため、という言葉で、その問いに答えてくださいました。そして、そこでのご自身の活動のスタンスを、「心のスクリーンは皆が一緒ではないけれど、困難なうちにある人と、共にあろうとすることが大事」なのだと語られました。

ニュースで報道されたあの大きな地震が起こってから6年が経ったこと、今では私の記憶からも、おそらく新潟県から離れた地域に住むみんなの記憶からも、いつの間にか薄れてしまっていたことに気付かれ、まず反省しました。山古志に住んでいる人たちの記憶の中には、間違いなくあの恐ろしかった時のことが刻まれていること、そして今でも心の傷は癒されていないでしょう。（M N）



会場に座っていた皆が、一様にそう感じたようでした。そして、もし自分に起こったら、とその恐怖と不安を想像することを始めました。

体育館で暮らしたことはないけれど、自分の家が壊れた悲しみのなかで、他人と一緒に暮らすのはすごく大変でストレスが多いだろうと思いました。印象に残っているのは、子どもの目がすごく不安そうだったことでした。（M K）

災害者と言われる人々のなかでも、自ら考えてすることがしたくてもできない人が、さらに災害弱者となります。松本さんは、災害弱者である子どもたちに対して聖公会が行った支援を、映像を交えて語られました。

子どもたちにとって、聖ルカ幼稚園でのオープンスペースのような、喜びをもたらすような活動が企画され、自由に参加できる体験の場を設けてもらえることは、傷ついた心を癒し、やわらげることのできる素晴らしい場であったことでしょう。スクリーンに映し出された子どもたちからは、笑い声が聞こえてきそうなほどの喜びが感じられました。私は、相手を受け入れるこ

との大切さ、“愛をもって互いに仕えよ”という言葉の大きさを感じました。(ＹＫ)

山古志の子どもたちがキャンプを通して次第に笑顔になり、すばらしい時を迎え、お年寄りの方たちが、あんなに涙を流して別れを惜しんでいたという話を聞いてとても心打たれました。あの頃、小学生だった子どもたちが高校生になり元気にしているということを聞いて、ほっとした気持ちになりました。(ＭＮ)

私たちは、松本さんの活動の様子から、バランスのとれた支援活動とは、支援を必要とする人々に寄り添うことへの想いと工夫が必要であることを知りました。災害の復興計画は、起こった場所によって全く違うからです。山古志の場合は、まず道路の復興に長い時間がかかりました。そして、建造物を直すハード面の支援と同時に、傾聴ボランティアのような、こころを触れ合わせる支援が求められたのです。けれど、そんな人々の善意を利用した、「エセ」と呼ばれる偽ボランティア団体も横行したそうです。その話を聞いた時、会場からは驚きと失望のため息が漏れました。

キリスト教の教えはすごいな、と思いました。愛をもって接しても、相手もそうしてくれるとは限りません。こちらが優しくしても冷たくされることだってあります。それでも人を信じて優しくあり続けることができることがすごいと思いました。(ＲＴ)

私も、もっと積極的に動けるように、人のために何かできるようにできたら、自分への大きな誇りになるのではないかと考えさせられました。(ＡＳ)

柳城の合同礼拝、その時間を私たちが持つ意味はなんでしょうか。

私は、これまで、お祈りの意味について深く考えたことがなく、何に対してお祈りしているのかもわかっていない部分がありました。今日、地震で災害に遭い困窮している人、生活に困っている人が救われるようにお祈りしていることを知り、祈ることはとてもすばらしいことだと感じました。お祈りをすることも支援のひとつなのです。(ＫＵ)

「行って、あなたも同じようにしなさい」と言う言葉を、身を以てしている松本さんは凄いと思いました。最後に歌った聖歌「わかちあえる、たくさんの見えないもの、どんな小さなことさえもわかちあえる」がいっそう心に響きました。(ＭＭ)

その祈りは、「私も涙を笑顔に変えていけるような活動に携わりたいと思いました。」「どんな困難があっても、それを乗り越えて生きていく人間の強さを感じました。私も何か機会があれば、そういう活動に関わりたいと思いました。」という力になっていくことでしょう。

（報告：鈴木裕子）

新任教職員自己紹介

新任の教職員方をそっくりな似顔絵と共に紹介します。似顔絵は保育科２年の定弘高さんに描いていただきました。

下原（しもはら）　太介（だいすけ）　チャプレン

“チャプレン!! 柳城以外では普段、どんな仕事しているの?!”。時折、学生の皆さんに、そう尋ねられます。確かに、皆さんが私の姿を見掛けるのは礼拝の時か、私がラウンジで缶コーヒーを飲んでいる時がほとんどかもしれません。そう考えると、何となく正体不明で、余程、暇を持て余しているように見えるのかもしれません(苦笑)。実は、暇を装い(笑)、皆さんに声を掛けてもうらのを待っているのです。誰でも、あまりに忙しそうな人には声は掛け難いですよね！暇そうにしている私を見掛けたら、いつでも声を掛けてくださいね!!

野々宮（ののみや）　徹（とおる）　先生

約30年間教員養成大学に勤務し、参りました野々宮です。体育やスポーツの歴史、運動の技術に関することなどを専門にしています。本学で、礼拝に参加する機会をいただき、今あること、生きていることなどを、気持ちを新たに考えるようになりました。礼拝は、週日のぎっしり詰まったカリキュラムの中央に、ふわっと浮かんでいるような、えも言われぬ時空といえましょう。

菊地（きくち）　伸二（しんじ）　先生

キリスト教概論や国語表現の授業を担当している菊地です。毎日、皆さんの元気なあいさつからはたくさんのパワーをもらっていますが、週に一回、チャペルで行われる礼拝も、私にとってはとても大切な力の源です。長い歴史をもつ柳城に10年ぶりに再びお世話になることになりました。皆さんといっしょに、大切な歴史の新しい一頁を作っていくことができれば、と思っております。

榊原（さかきばら）　博美（ひろみ）　先生

この４月から柳城でお世話になっています、榊原です。趣味は食べ歩きとハーブやアロマなどの健康癒し系です。美食食べ歩きの半面、家では栄養バランスにうるさく健康オタク？とかも言われますが、美味しいものか体にいいもののどちらかに当てはまるものしか食べたくない！という食へのこだわりがあるのです。恥ずかしながら、けっこう大食いです。どんぶりご飯２杯は食べられます。ざるそばやパスタはぜったいに大盛りでないと満足できません。美味しいお店の情報あればよろしくお願いします。

阿部（あべ）　力治（りきじ）　経理課長

３月から経理課に入りました。学校会計は初めてですが頑張ってみます。よろしくお願いします。柳城学院は歴史あるミッションスクールです。先日チャペルの礼拝に参加しました。学生の皆さんは会うと元気な挨拶をしてくれます。ところがチャペルでの聖歌を歌う時の小さな声にはびっくりしました。どうして??…大きな声で歌いましょう。式文の祈り以上に歌詞の内容がそれなりに素晴らしいと思うけど。

高橋達也（たかはしたつや）　入試広報課長

今年の４月から、入試広報課に配属になりました高橋です。この大学に着任して最初に感じたことは、学生の皆さんが明るく元気で挨拶をしてくれる姿が非常に多く、その姿に嬉しく思いました。この姿こそ、柳城の良さであり、伝統に培われた柳城の歴史ではないかと思います。この柳城の良さを高校生の皆さんに伝えていきたいと思います。

2010年７月20日発行　第18号
発行所　名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼発行者　名古屋柳城短期大学 宗教委員会
印刷所　株式会社　丸和印刷

この印刷物は再生紙を使用しています。